

泣いたペテロ

マルコによる福音書 14 章 66～72 節

正直に白状しますと、わたくしは、今日の聖書箇所を人前で朗読するのは苦手です。マルコによる福音書はまだなんとかなるのですが、これにもう少し書き加えられているマタイや、ルカ福音書のペテロの否認の箇所は読んでいると声が震えるのです。なにか大きな感情に捕らえられて胸が詰まるような感じがして、声が震えてしまう。先週、ゲッセマネの園でイエスさまがユダの裏切りによって捕えられる箇所から御言葉を取り次いだのち、今週はずっとこの泣いたペテロに心を添わせていました。今朝は、そこから示されたことを分かち合いたいと願っています。

ペテロはなぜ泣いたか、どのようにして泣き出す状況にいたったか、何を泣いたのか、そしてわたしは何に心を動かされたのか。考えることはたくさんあります。そもそも人間はどんな時に涙を流すのか、「いきなり泣き出した」とあることから、これは静かに涙を流したというより、声を出して泣いたに違いありません。号泣するイメージです。「泣く」をあらわす表現は結構あるのですが、この場面なら、号泣か、感泣（感極まって泣く）、さらにいうと「口」を二つ書いて、その下に「犬」を書く「哭」という字、「慟哭」（どうこく）という熟語も適切かもしれません。慟哭は論語の「願回死す、子、これを哭して、慟す」から来ています。孔子の弟子のなかでも一番の俊英とされていた願回が若くして死んだときに、孔子が哭して、つまり、声をあげて泣いて、取り乱したという。そんな泣き方、悲しみ方、それがこの箇所のペテロの「いきなり泣き出した」をあらわすのにふさわしいように感じます。

ペテロがいきなり泣き出した場所は大祭司の館の中庭です。すこし前に戻ってみますと、14章53節以下、「最高法院で、イエスが裁判を受ける」くだりに、「人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まってきた。ペテロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた」と状況が説明されています。偽証人までたてた裁判が進んでいく様子をペテロは遠くから伺っていたわけですが、お鉢が彼にも回ってきたというべきか、ペテロ本人も見咎められます。ここから彼は少しずつ中庭から、出口の方へ移動してゆきます。最初の鶏が鳴くまでに、一というの、最後の晩餐の席上で、イエスさまは、弟子の裏切りとつまづきを告げられましたが、これに対してペテロは二度、一度は「たとえみんながつまづいても、わたしはつまづきません」と答え、それに対して、イエスさまが「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うだろう」と予告をなされた。しかし、ペテロは力を込めて、「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と断言した。そういうことがありました。ですから、ここで関（時）の声を告げる鶏の鳴き声は、イエスさまの預言の成就と関わっています。まさにペテロが砕かれることになる特別な時（カイロス）を告げる声なのです。どのようにしてペテロが泣き出す状況にいたったかは、この最後の晩餐でのイエスさまとの会話で明らかです。人は、自分の言葉に対して、誠実、忠実でありたいと願う存在ですから、ペテロはイエスさまに申し上げた通りに、ゲッセマネの園で大祭司の放った下役たちにイエスさまが捕えられた時に逃げ出したけれども、その後を追って大祭司の館の中庭まで入って、事態の推移を見極めようとしたということでしょう。むろん、そこにはイ

エスさまのことが心配で、先生が好きであったという思いもあったでしょう。しかし、火の粉が降りかかってくる。大祭司に仕える女中のひとりが、中庭で火にあたっているペテロを見て、あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた、と言い出したのです。これに対してペテロは「あなたが何を言っているのか、分からない。何のことか理解できない」と返します。そして、その場を離れ、出口へと後退し始めると、鶏が鳴いた。しかし女中は確信があったのでしょう。実際、その通りであったわけですから、周りの人々を巻き込んで「この人は、あの人たちの仲間です」と騒ぎ出した。ペテロは周囲の注目を集めてしまうわけです。いや、わたしは関係ないと懸命に打ち消しますが、周りの人たちから、お前はガリラヤの者だから、仲間だろう、と言われてしまう。万事、窮したペテロは、ついに呪いの言葉すら口にしながら、あなたがたの言っていることは分からない。そんな人は知らない、と誓い始めてしまった。するとすぐに、ペテロの声にかぶせるように二度目の鶏が鳴いたのです。ここでペテロは我に返った。そう思います。なんということをしてしまったのか。そして、いきなり泣き出した。「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないというだろう」という主イエスの言葉を思い出したからだ。聖書は語っています。

このペテロの涙、泣いたペテロの胸の内は察するにあまりあるのですが、それで片付けていては言語喪失状況のままです。いま、わたしは上手いこと言いましたね。言葉がないのです。語る言葉がまだみずからのうちになく、言語化できず（言葉で気持ちが語れるようになれば、それなりに整理はついています）。まわりに人がいても、このときのペテロにかける言葉もない。知らないふりをしてあげるのが最大の配慮に思えるほどの挫折。嘆きの深い淵。泣くしかない、あるいは呻くしかないような状況。申し訳なさ、かたじけなさ、いくじなし、弱虫、大ぼら吹

き、腰抜け、恥知らず、自分を憐み、自分を罵っても罵り足りない。あなたと一緒に死んでもかまいません、ほかの弟子たちはつまづいてもわたしはつまづきませんと大見得を切りましたが、いざとなると出来なかった。こんな自分かというガッカリ感、出来る自分、そうありがたい自分を疑いもなく考えていたが、案に相違して、実際の出来事の中では、出来ない自分と向き合わざるを得なかった。見捨ててしまった。ついていけなかった。ペテロがいきなり泣き出したのには大体こういう感情がぐるぐると渦巻いていたのではないのでしょうか。

ここからは、しかし、この泣いたペテロから言葉にしがたいエモーショナルな、なにか大きなものにとらえられたような感覚を受けるのはなぜかという部分に入りますが、さきほど、わたしは関（時）を告げる鶏の声が、ペテロが砕かれる特別な時（カイロス）の声だ、と申し上げました。鶏は引き金であり、先に語られていた主の御言葉が彼を砕くのです。「しかし、あなたは今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないというだろう」と言われた主イエス・キリストのお言葉がペテロを裁く。と同時に救うのです。かくも主は、わたしのことを知っておられたのだという大きな驚きとなってペテロをとらえる。あなたは本当にわたしのことを知っておられた。わたしがどのようにあなたを裏切るかを知っておられた。知ってなお、この言葉を残されていた。そうです。イエスさまはペテロをよく知っておられた。このお言葉は、羊飼いが打たれることによって大混乱の中で激流に飲み込まれてしまいそうな羊に、ペテロに、イエスさまがあらかじめ投げかけた命綱の役割を果たしています。イエスさまは弟子たちをよく見て、彼らがつまづくことを理解していた。彼らは自分自身のことが見えていない。その見えていなかったことがまさに大祭司の館で、鶏が鳴いたときに分かった。自分が従えないものであることが露わに

なった。信仰のない者であることがわからされてしまったのです。それでも赦されていたこと、配慮を受けていたことを知った。ペテロがいきなり泣き出したのは、自分の本当の姿を知り、同時に主の深い赦しの愛に気づかされたからです。見当違いな歩みをする罪びとであることを、イエスさまから贈られた言葉によって、鶏の鳴き声とともに知ったのです。ペテロはわたしたちの代表です。このペテロの姿に、自分の姿が重なるからこそ、わたしはこの箇所を読むときに、心が震えるのだと思います。そしてそれは主の、わたしたちを思って下さる心の深さ、広さ、大きさ、篤さにふれるためと思うのです。「今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしを知らないというだろう」。よくもイエスさまは鶏の声に、預言を結び付けてくださったと感じ入ります。なぜなら、鶏の声は、夜明けを告げるものだからです。ここからペテロの新しい歩みが始まったのです。義の太陽であるキリストの恵みの光に照らされ、支えられて歩む人生が始まるのです。彼は鶏の鳴き声でイエスさまのお言葉を思い起こした。ペテロは泣きましたが、それはイエスさまのお言葉のなかで流す涙です。イエスの語られたお言葉のなかで自分を知る恵みの出来事です。憐みを受けるに値しないものが憐れまれ、守られていたことを知らされる涙は、やがて悔い改めの涙となり、主にいよいよ深く結びつきます。それがペテロの夜明けとなる。赦されていたから、愛されていたから、帰ってゆく道がある。激しく泣いたペテロの心はいわば更地となり、そこにあったこれまでの理想の自分の姿が解体される。みずからに絶望した者こそ、福音に出会うのです。そして自分を越えた先にある光を望み見させる力が与えられる。それは主が与えてくださる信仰です。もう自分の中に立たなくてもよい。キリスト・イエスに支えられた自分で生きてゆく。そういう道筋が整えられてゆくために、今日、今夜、ペテロは砕かれた。日ごとの悔い

改めに生きる者、恵みによって生かされる者となるために、この試練があったのです。わたしはそう思います。ペテロは一瞬のうちに生まれ変わるわけではありません。相変わらずという部分はこのあともありますし、失敗もします。人間は神ではない。伝道方針をめぐってパウロから罵られたこともある。しかし、おおもとのところで、ペテロはこの涙を流した日からやはり変えられてゆくのです。それはまた別の物語で、今日、取り次ぐ出来事ではありません。ただ本当に感謝なこととして今朝、心に刻みたいことは、キリスト教の信仰は、わたしが信じたから救われるのではない、わたしの内にあるこういうことが出来ますからということに根拠を持たない、ということです。自分のうちから生み出すもの、自分で従えらると思ふ心に生まれるものではない。それは主が、ご自身の命を与える覚悟をもって、わたしどもを愛して下さり、見守って下さるということ。主は、わたしを信じているのではなく、愛しておられるから、わたしは大丈夫だと言えることです。信じていたなら、つまづいた時点で終わりです。お前、裏切ったな、信じていたのに、で関係は切れてしまう。しかし、そうではない。お言葉が与えられていた。苦難の時、罪の落ちた時に、すぐることの出来る御言葉がペテロに与えられていた。そのレベルで愛されていた。まことにキリスト教は、恵みの宗教です。罪の赦しを中心に据えた十字架の宗教です。背く者をも包み込み、立ち帰りの道を備え、わたしどもを日ごとに新しくする命の宗教です。この主の愛を知る者だけが、涙とともに、主の赦しの愛に生きる務めを知らされるのです。

お祈りいたします。